「さいきの伝説と史跡・名勝」より（浅原関係抜粋）

編集　廿日市市河津原　今田　進

岩船の水

中国伝来の喫茶の風習は、足利時代の村田珠光（しゅこう）、室町時代の武野紹鷗（たけのじょうおう）を経て千利休によって茶道として完成する。さらに古田織部は秀吉の助言によって、武家流の茶道を創りあげた。織部から直接武家茶を伝授された者に、小堀遠州、上田宗箇、本阿弥光悦がいる。織部門下の武家茶で、いま残っているのは遠州流と上田宗箇流だという。

上田宗箇は幼名を佐太郎といい、永禄六年（一五六三）尾州星ヶ崎に生まれた。後、重安または長康と称し、竹隠是斎（是斎）と号した。上田家が信州上田から尾張に移ってからは丹羽（にわ）長秀に仕えており、重安も最初長秀に仕えて本能寺の変や九州・小田原両征伐等で数々の武功をたてたが、関が原の合戦で丹羽長重が敗れたので兵庫に隠れて剃髪し、宗箇と号するに及んだ。

すでに大阪の陣で戦乱の世は終わったが、宗箇の武人としての名声と茶人や作庭家としての評価は高く、四国の蜂須賀家が賓客として迎え、次いで紀州の浅野幸長（よしなが）に一万石で招聘（しょうへい）された。

広島城主、福島正則が改易（かいえき）された元和五年（一六一九）に浅野長晟が転封された広島に入った。このとき宗箇は長晟に従って広島に至り、佐西郡（旧佐伯郡・大竹市・広島市の一部）一万石及び別に茶料として七千石を給されて国老となる。

ところが、その翌年浅野家の老臣で宗箇とも親しかった亀田大隅高綱が長晟との意見を異にして藩を辞し、宗箇と姻戚関係の浅野左衛門佐（さえもんのすけ）（知近）が三原城を与えられなかったことで出仕を拒み、長晟の逆鱗に触れて誅せられるという事件がたて続けに起き

た。

ふたつの事件は宗箇にとって大きなショックだったらしく、家督を子重政に委ねて、自分の所領である浅原村（現廿日市市浅原）に入り、庵を結んで隠棲、専ら茶三昧を過ごした。

浅原村での隠棲は三年間だが、この間に村人との気さくな交流があったと伝えられ、「そうかさあ」と呼んで敬愛された。浅原には宗箇縁の岩船の水等が残っており、毎年上田流家元から宗匠を招いて「宗箇祭」が催され、地元の上田流を受け継ぐ茶人によって在りし日の宗箇に献茶が行われる。

そうかさあに捧げるバラード

身潜淺里嗜茶誰　身を浅里に潜め　茶を嗜むは誰ぞ

知是辭官宗箇姿　知んぬ　これ官を辞す宗箇の姿

曾侘武功都若夢　曾て武功を侘るも　都て夢の若く

遙懷陶令倚東籬　遙に陶令を懐うて　東籬に倚る

藩主浅野長晟は鷹狩りと称して浅原に乗りこんで、それとなく帰参を促したことが『佐伯郡廿ヶ村郷邑記』に載っているが、宗箇はもっぱら茶三昧の日々を送ってこれに応じなかった。宗箇の脳裏には東晋の役人を辞して郷里・潯陽に帰って農耕を勤しみ、東の籬に菊を栽培してこれを愛でた陶潜の姿と自らの容を重ねあわせていたにちがいない。

国道一八六号線が浅原を貫いている。浅原にはいまも上田家所有の「岩船の水」一帯の土地や、家事に使ったという「お手形の池」、道路改修工事で跡形を失ったが「いもが峠」の屋敷跡など宗箇縁の遺跡が残っている。いもが峠の道路改修工事以前には、畑

のあたりに青い小石が散らばっていたという。村人から青石一升を米一升で買い取って敷いたものだと伝えられ、伝説に従って昭和のはじめごろまで道行く里人は、屋敷跡に青い小石を拾って投げる風習があったそうだ。

宗箇のことを、浅原の人は「そうかさあ」と敬愛をこめた愛称で呼ぶ。宗箇は「そうこ」と読むのだが、「そうか」と読むほうが親しみが感じられる。「さあ」は誰々さんの「さん」である。浅原には酒宴の献杯・返杯に「そうかさあの流儀」というやり方が残っている。宗箇は村人を集めて時々酒宴を開いたが、杯のやりとりは不衛生ということから、献杯したい者を指名して、自らの杯を高く掲げると指名された人も「ありがたくちょうだいします」と応えて自分の杯を揚げ、臨席の人か酌（しゃく）とりの者に酒を注いでもらうのである。その伝えからも宗箇は合理的な考えの持ち主であり、気さくな人柄がうかがえる。

気さくな、といえば彼は自ら作った栗の木の盆を隣の村人に与えたといわれており、今も地元のKさんがだいじに所有している。

広島市の上田家に残る名器「さても」や、孟宗竹で作った花入れも、たぶん浅原隠棲時代に宗箇が自ら造り、己ら焼いたものである。

桜の畷（なわて）と木兎（みみずく）の手水鉢（ちょうずばち）

一桜の畷

花の浅原　桜の畷　寄ってみたいが見て通る

これは浅原に、いまも残る唄で、浅原に隠棲した茶人・上田宗箇に縁がある。上田宗箇は茶人であるとともに庭園を造る作庭家としても優れており、関が原の戦に敗れた後も、その腕前を買われて一六〇〇年（慶長五）

阿波（徳島）の蜂須賀家政に賓客として迎えられ、徳島表御殿の庭園を造ったり、浅野長晟に従って紀州から広島に入ってからも一六二〇年（元和（げんな）六）ごろに、広島に泉水館を築いている。泉水館はその後、多少改造されたが、〔浅野の泉庭〕とか〔縮景園〕などと呼ばれ、いまも広島の名所として上幟町の県立美術館と並

んで残っている。

浅原に隠棲した宗箇は、作庭家らしく郷南を南北に通じる小径（こみち）を拡げて、両脇へ桜を植え、「桜の畷」といった。

冒頭の唄は、その「なわて」を唄ったものである。

宗箇没後三百五十年記念事業のひとつとして、唄の故事に臨み、浅原地区の全域に三百八十本のソメイヨシノが植えられ、岩船の水の辺（あた）りに、十六代の上田宗家・宗嗣さんほかの手で枝垂桜が植えられた。

二　木兎（みみずく）の手水鉢

二〇〇二年から架替工事が行われた岩国の錦帯橋を渡ると、吉香公園が広がり、岩国城のある横山の麓に添って左に行くと、岩国城の藩主だった吉川家歴代の墓所があって寺谷という。

初代・吉川広家（一五六〇―一六二五）の墓は、山麓の広葉常緑樹に覆われた「山お塔」と呼ばれる所にある。広家の墓域に入ったところに高さおよそ一メートルの花崗岩でできた、俗に「木兎の手水鉢」といわれているものがある。

木兎の手水鉢は、前面に愛嬌のある、木兎の浮き彫りがあり、墓の参拝者を快く迎えているかのようだ。この手水鉢は、広島藩の家老で茶人の上田宗箇が広家から枝垂桜（しだれざくら）を数本贈られた返礼として、一六二五年（寛永二）に贈ったものだ。

吉川広家と上田宗箇は、ともに千利休に師事した茶人として親交関係にあり、広家は「頭は垂れても花は桜木、人は武士」との意をこめて枝垂桜を贈ったという。

一方、宗箇の贈った木兎の手水鉢は「世は暗くても暗（やみ）にも目の利くものが手許（てもと）で常に見守っている」との意味がこめられているそうだ。

ただし、この手水鉢は、当時港のあった岩国の今津に届いたとき、広家はすでに亡くなっており、二代藩主の広正（広家の嗣子）が広家に縁のある今津の浄土真宗西本願寺派の浄念寺に寄進して

長年、本堂の前に置かれていた。浄念寺は広家がかつて仮居していたこともある。

一九〇七年（明治四）、吉川家では由緒ある木兎の手水鉢を浄念寺から譲りうけ広家の墓の横に移して、今にいたっている。

ところで、広家から宗箇に贈られた枝垂桜（しだれざくら）は、そのころ宗箇が手がけていた縮景園か、あるいは浅原の桜の畷に植えられたものと思われる。

宗箇が浅野長晟に従って広島に入ったとき、大竹の小方にある亀居城を託されたが、その後隠棲した浅原の地も、よほど気に入ったらしく、上田家の先祖を祀る社（まつやしろ）を小方に造って「浅方神社（あさがた）」といっていた。「浅」は浅原の浅で「方」は小方の方だといい、その看板だけは今も広島の上田家（和風堂）に遺っていて、新年を迎えたとき礼拝することになっているそうだ。

このように浅原をこよなく愛していた宗箇だから、多分、広家から贈られた枝垂桜は、浅原の桜の畷に植えたであろう。

宗箇の遺髪塚

上田宗箇は一六三二（寛永九）、七十歳のとき家督を次男・重政に譲って隠居する。その重政が、一六五〇年（慶安三）四十四歳で死去すると、宗箇は二十日間、食を断って没した。享年八十八歳だった。

遺言によって宗箇の遺体は大野の小高い丘・串山で茶毘（だび）に付され、遺骨は金槌で粉砕されて海に投げられた。現代一部ではやっている散骨の魁（さきがけ）をしたわけだが茶毘の跡には宗箇の遺髪が埋められ、自然石で塚が作られた。

以後、宗箇の内室や、三代・重次、九代安虎、十代・安世、十二代・安敦、十三代・安靖、十四代・宗雄、十五代・宗源、ほか上田家の墓域は宗箇の遺髪塚を中心に形成されている。